

小・中学校専科教員 研修会後にいただいた質問に対する回答

人は、自分の力以上のことはできません。自分の力以上のことには気づけません。怖いのは「分かったつもり」です。「知っている」ことが「実際にできる」とは限りません。

この問答集を読みながら、「納得」できることが出てくれば、その都度、ご自分で考えたことや閃いた指導などを書き込んでみてください。右側はそのためのスペースです。

自分のやり方が正しければ、必ず子どもたちは伸びていきます。もし、そうでないとしたら、自分の指導、または授業の捉え方が間違っていると考えられます。教師のプライドを優先するのではなく、教科書を終わることでもなく、教師を信じて頑張っている子どもたちにきちんと力をつけてやるのが教師の仕事です。

子どもが「できない」のではなく、教師が「正しい指導」を知らないこと（無知）が、多くの問題の要因となっています。教師が教える時間が増えれば増えるほど、「間違い探し」や「間違いの修正」に気持ちが向かってしまいます。それに慣れてしまうと、子どもたちのポテンシャルを過小評価する（未熟さばかりが気になる）教師になってしまいます。むしろ、彼らの自己表現、ひらめきが生まれるような「出力」の機会を増やし、彼らのほとぼしる感性に感嘆できるような教師になることです。それが子どもたちを伸ばす「魔法の杖」となります。

1) 言語活動の流れにつながりを持たせる工夫

「つながり」を作るためには、ゴール（最後の統合的な活動）を明確にしておくことです。金太郎飴のように毎回、同じように授業を進めるのではなく、到達地点（子どもが何がどこまでできていけばよいか）を彼ら自身に知らせておくことが全てのスタートです。そして、適宜、本時で取り組んでいることがそれにどうつながるのかを教師が伝えてやることです。「はい、次」ではなく、「何のためにやっているのか」を説明できるようになった時、単元と単元がつながり、練習と言語活動がつながるようになります。教師は、単元という「コース料理」（毎時間、学習者が「今日は何が出てくるのかな」と楽しみにする授業）をデザインするコックです。

2) パフォーマンステストは、いつ、どのように行うのか タブレット端末をどう使えば良いか。

学習指導要領の「話す力」の「発表」に書かれています。教科書を終わらせる指導をしていると、こなすことに目が向かい、肝心のねらいを忘れてしまいます。たとえば、学習指導要領の外国語活動のねらいは次の通りです。

目標 (2) 話すこと [やり取り]

- ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようになる。
- イ 自分ことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。
- ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問したり質問に答えたりするようにする。

(3) 話すこと [発表]

- ア 身の回りの物について、人前で実物を見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

この下線部が重要なポイントです。しかし、多くの先生は「簡単な語句や基本的な表現」だけに目が向かっており、教科書で習ったことを使わせる(覚えさせる)指導を展開しています。

「人前で」とは、ペアではなく、小グループ、そして最終的にはクラス全体の前で行うことを意味しています。だとすると、系統的、計画的に子どもたちがそれができるように育てていかねばなりません。その単元計画(運動会や合唱コンクールで最後に「感動」を与えるのと同じ)を丁寧に練るのが教師の仕事です。

3) 言語活動を活性化するにはどうすれば良いか。「評価」をどうすれば良いか。

言語活動に限らず、授業を活性化するのは、教師の指導技術ではありません。学習者の心理や心の動きを理解し、決め決めではなく、臨機応変に対応できること、何よりもコメント力、仲間同士をつなげる力があるかどうか鍵になります。

指導と評価はコインの表裏の関係です。別々のものではありません。表は「つけなければならない力」であり、「正しく育った生徒の姿」です。裏は、そのように育てるための系統的な指導と教材開発です。「つけなければならない力」とは、学習指導要領に示されている目標です。教材開発とはプリントを作るのではなく、課題や発問を工夫して学習者を惹きつけられるようにすることです。こう考えると、「指導したこと(教えたこと)を覚えているかどうかを評価する」という考えは、コインの表と裏が反対になっていることがわかります。

教師の頭の中にある「育った生徒(児童)が具体的に何をどのようにできるか」が明確になっていなければ、評価項目を作ることはできません。

例えば、スピーチの評価項目を「①声の大きさ ②アイコンタクト ③英語の発音やストレス ④教科書で学んだ表現を使えているか」といった内容は、スピーチを表面的に捉えている教師(テキストに出ているからやるという発想)の観点です。それを数値化して、合計点を出し、優秀であった子どもを発表します。しかし、それで終わりです。残念ながら、「教科書に出ているからやる」というスタイルは、どの単元でも同じです。

一方、「① 相手を意識した話し方(間の取り方や抑揚) ② 聞き手への問いかけ ③ 伝えたいメッセージが明確か ④ 内容が論理的でわかりやすいか」という観点を用意できる教師は、スピーチの内容にも注視させようとします。そこで、スピーチをした子どもに対して、コメントや質問を書くという活動を入れています。授業は、スピーチを指導し、最後に評価をして終わりではありません。あくまでもスピーチという「手段」を使って「どのようなスピーチをすれば、相手に伝わりやすいか」を話し合えます。それがコミュニケーション能力の土台となるからです。さらに、評価用紙を集め、「聞き手」の方も適切に評価できているかどうか確認します。これは、教師自身が人前でのスピーチの経験があること、スピーチを「どんな力を身につけるための手段」にするのかをきちんと押さえていることがわかります。つまり、教師が言語活動を上っ面だけで捉えているのか、それとも一人ひとりの子どもが何をどこまでできればいいかを詳細なレベルまで考えているかということなのです。

学習をやりっぱなしではなく、必ず next stage に向けて「内発的動機付け」を図ろうとできる。それが真に学習指導要領を理解して授業をしている教師と言えます。大事なのは、教科書を終わることではなく、学習指導要領に書かれている「つけなければならない力」をつけたかどうかなのです。

教科書の進度、教科書をどう教えるか（デジタル教科書をどう使うか）という目先のことだけに関心が向かっている教師は、自分で責任を持って「ゴール」（つけなければならない力）を設定することができません。「教科書を終わっていること」を免罪符のように考えていると、仮に力がついていなくても言い訳ができます。力をつけるのがプロ教師。給料（税金）をもらっているのですから、「教科書は終わっています（私は全て教えました）」というスタンスではなく、クラスの生徒に向かって「たとえ、教科書は全部終わらなくても必ず力をつけるよ」「英語を好きにするよ」と言い切ることです。そのように堂々と宣言をすれば、もう逃げられません。そこから、人真似やデジタル教科書べったりの授業ではなく、本気で子どもたちの実態（習熟度）や興味関心を活かした授業に取り組むことができるようになります。

4) やり取りをする際、書いたことを発表することにならないようにするには？

マッピング、マンダラート、カードや付箋紙（いずれもメモ用）を使うことで、子どもたちは可視化できるようになります。言いたいこと、相手が言っていることを丁寧に確認しながらやり取りを続けていくと、暗記ではなくなり、夢中になって取り組むようになります。詳しくは、大修館書店『英語教育』10月号（9月12日に発売）の特集記事をお読みください。小学校4年生が、ノートに書かずに、即興でやり取りをしている様子、中学生たちが堂々と即興でやり取りをしている映像、さらには自信がついたという感想などが読めます。

5) やり取りに「正確さ」をつけるための指導のあり方

なぜ、やり取りをしていると「正確さ」が消えていくのでしょうか。それは、教師の適切なタイミングでの指導が抜けているからです。ですから、相手を変えてペア（またはグループ）で何度もやらせていると、だんだんいい加減になっていくのです。2回ぐらいやったら、教師は指名してペアに発表をさせます。その時、間違えたことを言っていたら、丁寧に recast してやります。「違うよ、こうだよ」という言い方は傷つけますから、たとえば Tokyo went yesterday. と言った生徒がいたら、Oh, YOU went to Tokyo yesterday. Aha. And then? とさりげなく直してやります。

もう一つ、お勧めの方法があります。最初から「正確さ」を求めてして、教師がくどくどと説明をしてしまったり、一人ひとり間違いを指摘してしまったりすると学習意欲が減退します。有効なのは、子どもたちが自分で行う「間違い探し」です。子どもたちのやり取りを録音（または録画）しておいたものを誰かわからない状況にして文字化します。間違いのあるダイアログを教師が3つほど用意し、どこがおかしいかを見つけさせるのです。まずは一人で考え、それからペアになり、そしてグループで話し合わせます。こうすると、クイズのようになり、今まで学んだことを復習することができます。

6) 授業に進んで取り組めない生徒への支援

生徒が悪いのではなく、多くは次のような原因があるとされています。それは「つまづき

が放置されたままで学習（授業）についていけない、授業が練習ばかりで楽しくない、教師が嫌い」といったことです。特に、教師が嫌いという場合、どんなに面白いことを用意しても、心に蓋がされている状況ですので、何も入ってきません。一度ギクシャクしてしまうとなかなか元に戻れないのが人間関係です。教師はカットとなって感情的に叱りつけてしまったり、負担感（プリントや宿題などが多いこと）を与えてしまったりすると、クラス全体が暗い雰囲気になってしまいます。むしろ、「今日も授業に来てくれてありがとう」という気持ちで取り組むことが大事です。そして、「わかる授業」ではなく「できた!」という声が全員から出てくるような授業を心がけることです。

その他の要因については、当 HP の 1/f ゆらぎの最後に載せておいた「8つの授業マネジメント」に詳細が書かれてるのでお読みください。

7) 活動（授業でやったこと）をどう「定着」（長期記憶）に繋げれば良いか

定着に必要なのは「回数」（量）です。つまり、子どもたちが英語を「使う」場面を増やすことです。教師のお喋りを減らし、子どもたちが英語を使ってチャットをする、討論をする、レポートをする、自己表現をする時間を増やせば、定着が早くなります。「全て学んでから」と考えてしまうのは、そのような悲しい過去を経験してきた負の遺産が残っており、それを伝言ゲームのようにしているためです。英語は技能教科です。ALT の英語がほとんど聞き取れるようになるには、教師の説明ではなく、正しい発音ができるようにする、内容語だけを強く読めるようにする、チャンク（意味のあるひとかたまり）を頭から理解する訓練をするといった「実際の体験」を用意することです。マッピングをしながらチャット（small talk）をする、「どこで間をとり、どのように読むか」というト書きを書いてから教科書の音読練習をするなど、正しい指導の回数が多いほど、力がつき、長期記憶ができるようになります。

弁証法に「量質転化の法則」というものがあります。量が増えると分母が増えるわけですから、それに比例して質（分子）もよくなっていくということです。ただし、数さえこなせばいいのではなく、あくまでも量とは「本気で取り組んだ回数」です。行列のできるレストラン（ラーメン店）は、それだけの量、足を使って情報を集め、時間をかけて研究をした結果（専門性の高さ）です。教師も、研究授業（人に見せる授業）の回数が、教師の授業力と比例します。

8) ALT との役割分担について

共同（分担作業）ではなく、協働（お互いにより影響を与え合う）にすることです。そのため、単元全体の計画を一緒にたて、定期テスト（パフォーマンステストを含む）と一緒に作るなどして、ゴールを共有しておくことです。すると、学校に来ない日でも、ビデオレターを送ってくれるようになります。また、JTL の small talk をより自然な内容にしてくれます。Hi! Do you like tennis? のような唐突な問いかけではなく、Oh, is that tennis racket yours? Cool. It's new. Do you like tennis? のように自然な文脈に直してくれます。大事なのは文法や単語を教えることではなく、より「英語らしい表現」が身につくようにしてやることです。だとしたら、日本人教師の力だけでは無理です。お互いのレスペクト（尊敬と信頼）があれば、TT はどれだけでも楽しくすることができます。

9) 「思考・判断・表現」をどう評価すれば良いか

文科省のHPでいろいろな映像や資料が紹介されています。全ての教科で「思考・判断・表現」に取り組んでいるわけですが、教師がレールを敷く（教師がさせたいことを考える）のではなく、子どもが自己決定をした内容を「探究」していくプロセスを評価します。つまり、授業で学んだことを、自分なりに「活用」（新しい場面で、自分の力だけで学んだことを組み合わせ、問題解決ができる）できているかどうかを、それぞれ「学習への見通し」をたて、「オリジナリティ」を發揮し、「的確さと適切さ」を持って学習できているかなどを加味して評価します。

今までのような「この文法を使って私の趣味というテーマで5文で書きなさい」という問いから、「この内容を読んで自分がハッとしたことを1つ取り上げ、その理由と自分の考えを30語程度で書きなさい」のような問いに変えることが大事です。世の中が、ガソリン車からモーターで動く車に変わっていっているように、教師の意識も、教師が中心になって教え込む授業から学習者が夢中になって取り組む授業へとシフトしていくことが大事です。

10) ステップアップさせる問題をどう設定すれば良いか（応用から活用へ）

学習指導要領に書かれている言語活動のねらい（どんな力をつけるためにその活動をするのか）を自分の言葉で説明できるようになることが大事です。教科書には簡単に紹介されているだけなのでよくわかりません。教師が「なぜ」と「どのように」を加味しながら、見通しを持って単元全体の学習ができるように伝えてやります。それができると、その段階に至るまでにどんな練習が必要なのかがわかるようになり、練習をA-A'-A''のように「プラス1」ずつ変化を加えていくことができるようになります。

11) 中学校校区の小学校同士の連携のあり方とは

シラバスを1つ（統一シラバス）にすることです。すると、他の学校の取り組みが自分ごとになります。お互いに授業を録画し、時々（放課後）、オンラインで中学校校区の関係者たちでビデオによる授業参観をします。そこで気づいたことを話し合うようにします。

また、統一シラバスを作ることで、小6のゴール（＝中1のスタート）が意識できるようになります。中学校1年生の最初の8ページほどは、小学校の学習の復習になっています。つまり、小学校の教師は中1の教科書を手に入れ、「全て自分の力で音読できる」「書かれている語数でスピーチができる」「英文の内容（速さ）が聞き取れる」などの到達地点を確認し、それをどの子も実際にできるようにして中学校に送り出すことが必要になります。

12) 個別な配慮（学力面、生徒指導面）が必要な子どもへの支援はどうあれば良いか

教師は教えながら、同時につまずいている子どもたちに支援をするということはなかなかできません。まして、「個別最適な学び」を勘違いして、個人学習（プリントやタブレット端末を使った活動）を増やしている方がおられます。この時間が長ければ長いほど、得意な子と苦手な子の学習差が広がっていきます。教師は教室を人工衛星のようにぐるぐる回りながら、目的もなく観察（ちゃんとやっているかどうか）しています。そうではなく、事前に診断的評価（今までの学習のつまずきの状況）で実態を確認しておき、想起できるつまずきを大きく3つぐらいに分けておき、それに対する「ヒントカード」を用意しておきます。それには答えは書いてありません。ヒントなので、最終的には「自分で見つけられる」「自分で気づける」ように、

「教科書の●pの▲行目を読んでごらん」とか「昨日の授業で書いたノートをもう一度読んでみよう」とか「言いたいことをもっと簡単に、小学1年生でもわかる日本語にしてからそれを英語にしてご覧」のように書いておくのです。

もう一つは、教師の「観察眼」を高めていくことが大事です。そこで、データを集めます。「指導用カルテ」(座席表)を用意し、活動中、個人やグループについて気が付いたことをどんどんメモをしていくようにするのです。毎時間それをしていると、2週間くらい経って振り返るときに、パラパラ漫画のように見ていくので、つまずきや成長(変容)の様子が手に取るようにわかります。

ALTとのTTでは、ALTにも同じようにカルテを渡して、気づいたことをメモしてもらい、それをお互いに見ながら、次時の指導について考えることができます。

13) グループの話し合いで、一部の子どもだけが話している

まずは、一人で自分の考えをノートに書く時間をとることです。それからグループにしますが、「発表の時はノートを見てはいけない」「一人1分」「終わったら、グループの意見をまとめ、ジャンケンをし、勝った人が何も見ないでレポートをする」というルールを与えておきます。

それが当たり前(クラスの習慣)になっていくと、主体的に取り組める子どもたちが増えて行きます。